

# 水稻秋落ち、ごま葉枯病

## マンガン施用で解決

新潟県農総研

新潟県農業総合研究所

は、水稻の秋落ちやごま葉枯病をマンガン資材の施用で軽減できることを確認した。最低でも土中のマンガン濃度が50〜80ppmになる量を施用する。土中のマンガンが多すぎると悪影響が出ることもあるので、土壌分析に基づいて量を決めることを

勧める。

ごま葉枯病は栄養分を保ちにくい砂質の土壌など、秋落ちが発生する水田で発生しやすい。同研究所によると、秋落ちしやすい水田は通常、鉄やケイ酸などと同じくマンガンの(易還元性マンガンの)も少ないという。同研究所はマンガンの

補給による同病や秋落ちへの影響を試験した。マンガンの資材を4月に10

ppm、2ppmほど県内の老朽化水田に施用。水稻「コシヒカリ」を栽培した。発病や秋落ちはほとんどなく、収量は10ppm、600ppmほどと、マンガンを入れなかった水田の1・2倍だった。

試験をした水田のマンガンの濃度は2ppmと低かった。ただ、施用しすぎるとマンガンの過剰症になることもあるので「土壌分析に基づいて施用する必要がある」(同研究所)としている。濃度は最低でも50〜80ppmに調整する。

新潟県内では下越、新潟地域の砂質水田を中心に、秋落ちやごま葉枯病が多発する傾向にある。詳しい仕組みは不明だが、土中のマンガン濃度を調整するようにしてから被害が減ったという。